【モータースポーツコラム】

筆者：長谷川俊也

【高橋国光さんとの想い出】高橋国光さんを偲んで

私が雑誌で仕事をするようになったのが1986年、モータースポーツ月刊誌のオートテクニック編集部に入ってからでした。

当時は、全日本F2、全日本耐久、全日本ツーリングカー、富士グランチャンシリーズが主要シリーズとして開催され、３月の第１週から11月までほぼ毎週末、日本各地のサーキットでレースが開催されていました。

ベテランドライバー達はそのすべてのレースに出場され、高橋国光さんもその例に漏れず全日本F2と全日本耐久、富士グランチャンではアドバンのエースドライバーとしてマーチ85Ｊ、ポルシェ962Ｃ、アドバンMCS Ⅵで出場。
全日本ツーリングカーでは三菱ワークスからスタリオンターボで出場していました。

メディアの仕事に携わる前からモータースポーツのファンだった私は、国光さんがホンダのライダーから日産ワークスで4輪レースに転身しサニーやブルーバード、フェアレディ、スカイラインGT-Rをはじめ、

6ℓ・600馬力のプロトタイプカー日産R382と幅広いレースに出場していたのは知っていましたが、年に一度の日本グランプリ（当時はスポーツカーレース）などビッグイベントでは優勝争いをしながら2位、トップを走りながらリタイア、と優勝に恵まれなかったのが残念でした。

私が初めてレース観戦に訪れたのが1981年の富士グランチャンでした。当時はTBSで富士グランチャンの中継をやっていて、首都圏では人気のレース番組でした。当時はトップドライバーとして「日本一速い男」星野一義さんを筆頭に、長谷見昌弘さん、中嶋悟さんがラインナップに名を連ねていました。

国光さんは正直、一世代前のベテランドライバーという意識でした。しかしそのなかで黄色いロイスRM1を駆る国光さんは、ポールポジションから他を圧するスピードで快勝。第２戦もポール・トゥ・フィニッシュで連勝。
が、しかし、第３戦はエンジントラブルでリタイア。第４戦はポールポジションを獲得するも、決勝ではホイールトラブルで後退し、シリーズタイトルを逃しました。「無冠の帝王」という名称が頭をよぎります。

81年当時の国内レースは、前年国内レースタイトルを総ナメにした長谷見昌弘さん、星野一義さん、ホンダエンジンでF2に臨む中嶋悟さんの3人が、レースを主導していました。その後、アドバンが国光さんを擁してF2や全日本耐久に出場を始めました。

そんな中の87年夏、初めて国光さんに取材をさせていただく機会を得ました。全日本耐久選手権の富士500マイルに出場する時です。

国光さんはなぜ「走るのか」という漠然とした問いに対して、
「速さへの欲求かな。ボクはまだ速く走れるんじゃないか、一所懸命に考えて走る。別にお金が欲しいとかではなく、まだ手に入れていないその先に、まだあるものを得るため、一所懸命に走るボクにとってのハングリー精神は、速さへの欲求」と。

しかし、そのインタビューの中で私が最も印象に残ったのは、ドライビングテクニックやレースへの考え方ではなく、国光さんのレース前のゲンかつぎのお話でした。
「御殿場の『ひろ田』で特注のうな重を作ってもらうんだ。ウナギ3枚重ねでその上から自然薯をかけてもらう。これでスタミナつけないと暑いレースを乗り切れないしね」
1940年生まれの国光さん、この時47歳。レースに入る前のルーティーンワークとして、気持ちの切り替えのひとつだったのかもしれませんが、ちょっと濃厚な食事のお話は強く印象に残っています。

このレースではK.アチソン、茂木和男さん達と組み見事優勝、また、3度目の全日本耐久チャンピオンを獲得しています。

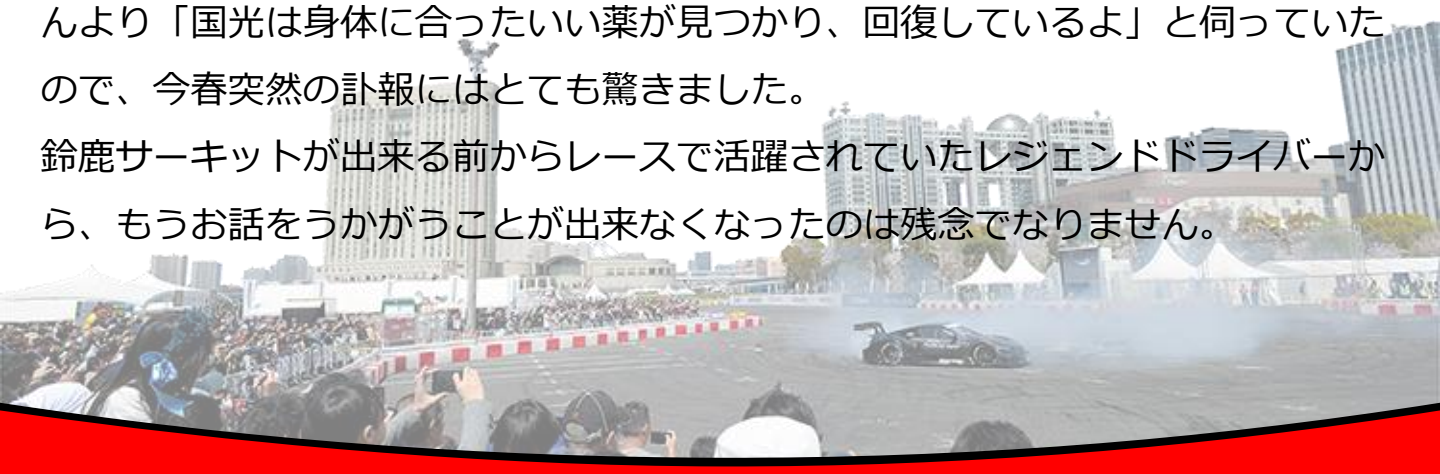
国光さんはレース以外でも映像メディアに出ていました。

1969年には映画「栄光への5000キロ」では主役の石原裕次郎扮する五代のスタントとして日産R381をドライブ、1977年封切りの「サーキットの狼」では本人役でスーパーカーレースにフェアレディZで出場。
バブル期にフジテレビが制作した「日本モータースポーツ史」では、60年代のレースを語っています。そのほかにも多くのメディアで国光さんを取り上げています。

私は90年代をカテゴリーの違うメディアで活動していたため、直接国光さんへ取材する機会はありませんでしたが、2000年代に入ってから三栄グループの会社で仕事をすることになると、そのセクションはチーム国光のオフィスが隣接していました。

そのため、週に何度か国光さんを社内でお見かけすることがありました。当初はレジェンド過ぎるドライバーを見かけビックリもしましたが、あまりにも普通に活動され、社内に溶け込んでいるので次第に慣れました。

　その後、私は、レジェンドレーシングドライバーズクラブ事務局の業務のサポートをするようになりました。業務の中で、以前より国光さんが体調を崩されて療養されていた話を聞きます。昨年の夏にはこのクラブの会長である大久保さんより「国光は身体に合ったいい薬が見つかり、回復しているよ」と伺っていたので、今春突然の訃報にはとても驚きました。
鈴鹿サーキットが出来る前からレースで活躍されていたレジェンドドライバーから、もうお話をうかがうことが出来なくなったのは残念でなりません。



（プロフィール）

長谷川俊也（ハセガワトシヤ）
1960年生まれ、神奈川県小田原市出身。「オートテクニック」「GPX」「ラリーX」(山海堂)、プレイドライブ（芸文社）、レーシングオン（三栄）で編集に携わる。昨年夏より「サンエイ・フォトアーカイブス」で東京レーシングカーショー、レーシングフェアレディ、レーシングセリカの電子写真集の制作を行なう。現在もメディア活動のかたわらレジェンドレーシングドライバーズクラブ事務局のサポートを行なっている。